

高橋盛孝 著

「藏漢対訳 賢愚経」

小川 一 乗

賢愚経は、*avadāna* (譬喩物語) に属するものとされ、撰集百

緣経 (*Phira-pramukha-avadāna-sataka*, 大正大藏経第四卷 No. 200, 影印版西蔵大藏経第四〇卷 No. 1012) と密接な関係にある佛教説話集である。「賢愚経」という経名は、伝えるところによると、漢訳された種々の説話を集めて一本としたものに中国人 (沙門恵朗) によって命名されたということであるからそれは、恐らく「善悪種々の譬喩物語を集めたもの」という意味であろう。このように賢愚経は、中国において、漢訳されてあった説話を集めたものであるから、最初から一つの原本として与えられてあったわけではなく、従って経名も、中国人による命名であって、サンスクリット原名の訳ではないということである。

まず、本書「藏漢対訳 賢愚経」の紹介を始めるに当って、それに先立って、賢愚経についてのビブリオグラフィを簡単に述べておきたい。しかし、賢愚経に関する紹介・研究は、案外に少なく、干瀉龍祥著「本生経類の思想史的研究」(東洋文庫昭和二九年) 一二九頁～一三〇頁その他簡単に紹介されてい

るだけではなからうか。従っていまは、本書の著者によって発表されている論文「賢愚経とザン・ルン」(東方学第二六輯) や、「賢愚経探查記」(日本西蔵学会会報第九号) に基いて、それを略説することにした。

賢愚経は、現行的には、漢訳とチベット語訳、それに蒙古語訳としても与えられている。その中、漢訳は慧覺等(慧徳、曇覚など)の訳とされ、諸異本を数えるが、大正大藏経第四卷本緣部下 No. 202 に大体の校正がなされて収録されている。

チベット語訳は、諸大藏経に収録され、北京版(影印版第四〇卷 No. 1008) では諸経部 (*mdo sna-tshogs*) に先に掲げた撰集百緣経などと共に収録されている。そしてそれは、デンカルマ目録をはじめとして諸版において、「シナからの訳 (*rgya las dsgyur-ba*)」と記されていることや、経名も「*Hdsans blun shes-bya-bahi mdo*」(賢愚という経) という漢訳名「賢愚経」そのままの訳出であることからも、漢訳からの重訳本と見做されている。従って、チベット訳からサンスクリット原名を知るといふ一般的な仕方でも、本経の場合あてはまらない。ナルタン版その他に *Danamko-nama-sutra* というサンスクリット名が見出されるが、よく解読できず、正しくのサンスクリット名であるか否かは明らかでない。また訳者についてもデルゲ版とナルタン版の絵目録に (*Chos grub*) (法成) の名が見えるのみである。チベット訳に基いて、賢愚経のドイツ訳を試みたものとして、Schmidt, I. J.: *Hdsans blun, oder der Weise und der Thor* (St. Petersburg, 1843) がある。

蒙古語訳は、参見していないが Unger yin Dalai (比喩譚海) の題名を有し、チベット訳 (特に北京版) からの訳出でないかと推定されている。

いま漢訳とチベット訳とを比較してみると、品数の上で、漢訳六九品、チベット訳五一品 (後に閑説する如く、中には五二品もある) と相異なるばかりでなく、その順序も甚しく相異している。従って、チベット訳が現存の大正大藏経に収録されているような漢訳本からのそのままの重訳でないことは明らかである。しかし、チベット訳が、ともあれ漢訳からの重訳であろうことは疑いなく、その点については、本書の著者が、内容の上から少しく論証している (賢愚経とサン・ルン 四九頁下)。

ちなみに、大谷大学所蔵のチベット蔵外文献の中にも、目下整理中ではあるが、賢愚経が二本まぎれ込んで見出されている。いま仮りに、それらを A 本、B 本として簡単に紹介しておく。A 本 (一〜281 枚) は、完全な単行本と見做され、紙型 13.5×60.5 cm に印刷され、板型は 7×56.5 cm で、行数は六行である。タイトルには、サンスクリット名とチベット訳名とが記され、サンスクリット名は先に示したナルタン版のと同じである。北京版との相異は、タイトルの直後にある *ban-po dan-po* に続く *dkon-cog ssum la phyag-hsthal-lo* (三宝に敬礼する) の一文が挿入されていること、五一章で終わらずに第五二章までを含んでいること、及び、奥書 (嘆徳文のようなもの) が約一葉裏表にわたって附加されていることである。その中、内容的に第五二章までを含んでいるということは、著者

によれば、チベット訳本としてはロンドン大学蔵本のみということであるから、この A 本がそれと同一本であるか否かはともかく、資料の上で大変に興味深い一本であることは確かである。管見するに、この A 本の第五二章の品名は *ngyal-pu su-sa-dchi lo-ho* とあるから、多分、漢訳の第七品「須闍提品 (須闍多太子本生)」に概当するのではなからうか。もとより、前五一章の中に、この品は含まれていない。

次に、B 本 (*sa. 196-462 枚*) は、ナルタン版の別刷であって紙型 18×63 cm に印刷され、板型は 11×58.5 cm で、行数は七行である。北京版との相異としては、A 本と同じく *ban-po dan-po* に続く *dkod-mchog ssum la phyag-hsthal-lo* (三宝に敬礼する) の一文が挿入されている。

二

さて、本書「藏漢対訳 賢愚経」は、序文と本文と索引とから成る六三九頁に及ぶ大著であり、しかも著者が序文に述べている如く、ミス・プリントを免がれるために、手写の稿本をそのまま写真にとって製本した縦三十二センチ、横二十六センチの大型本である。

序 (五〜七頁) では、本経のチベット語訳出者と看做される *Chos-grub* (法成) に関説されているのが注意される。それ以外の本経についての解題などは、先に示した如き二論文において、著者によってすでに公表されているということと殆んど省略されている。チベット訳の訳出者についての閑説というのは

「法成」が漢人であるという説が学界での定説となりつつある現状に対する疑問を述べていることである。略説すれば、法成のことを *hgos chos-grub* というのは、「吳法成」の音訳であり、法成 (*chos-grub*) なる名前に *hgo, hgos* (吳) という漢の姓を冠したものであって、彼は漢人である⁸ という説を、龍谷大学の上山大峻氏の研究に依って取りあげ、その所説に対する疑問を四つの点で披瀝し、そして法成はやはりチベット人ではなからうかとの著者の見解を示している。

本文(八〇五七三頁)では、賢愚經のチベット訳文が一句づつ示され、それに対して、必要と思われる語意、漢訳からの直訳(和訳)文、チベット訳の異版との校異が、順次に示されている。チベット訳は、Schmidt 訳本を底本とし(従って第五章までを研究対象とし第二章は省かれて)、ローマナイズして掲げている。漢訳は、鉄眼本に依って、チベット訳文と一致するものは鉄眼本を直訳し、一致しない部分には、チベット訳からの口語訳を与えている。異版との校異は、ロンドン大学蔵本と北京版との二版によって行なっている。いまその一例(九頁)を示すと、次の如くである。

(3-13) *bcom-ltan-pdas ga-na-ba-der lhags-nas* |

ga-na, ka-na, sbst. gan-na, skt. krcana, where ?

gan-na-ba, the whereabouts of a person. (204)

de, that, he, it, to……(635)

lhags-pa, to approach (1337)

(訳) すすんで佛所にいたり(鉄) Bは右側よりの句あり。

(校異) *ga-na… B. gyas logs-na [gyas, the right-hand*

side 1152, logs, the side 1224] C. gan-na…

この中で、チベット語の語意や校異のところにある英訳の後()内の数字は、チャンドラ・ダス蔵英字書 (*Das S. C. A Tibetan-English Dictionary, Calcutta, 1902*) の頁数である。Bはロンドン大学蔵本のチベット訳本、Cは北京版のチベット訳本である。劈頭の(3-13)は、Schmidt 本の三頁十三行目の意味である。

この一例に示されている如き内容をもって、チベット訳賢愚經全文の一句一句が、漢訳との対照の下で、校合されつつ必要に応じて解説も試みられている。著者が長年にわたって逐次整理されたものであろうことが偲はれる大変な労作である。

この一大労作を眼前にして少しく躊躇を覚えるが、二、三の点について筆者の勝手な希望を述べてみたい。

(1) 本書は、すでに明らかな如く、賢愚經のチベット訳本を資料の中心としたものである。すなわち、チベット訳を中心に漢訳との対照の下で、その解説を試みたものといえるのであって賢愚經のチベット訳に対する Schmidt に続く研究である。もとより Schmidt の場合と異なり、チベット訳の完全な解説を期したものは、或は期そうとしたものではなく、あくまでも賢愚經の資料の整理——チベット訳と漢訳との対照——を目的とした研究である。それ故にこそ、勝手な希望ではあるが、著者自らが悔んでいるように、デルゲ版との対校の完全を期していないのが残念である。チベット佛教文献にして大藏經所録のも

のは、何といつてもデルゲ版を最も重要視する必要があるかと思われる。賢愚経の場合でも、著者が日本西蔵学会会報第九号「賢愚経探查記」に述べている如く、「デルゲ版は、碩学の手で出来得る限りサンスクリットの標準形に近づけたものでないか」という感じを受けた」ということであり、特にチベット訳が漢訳からの重訳である場合には、デルゲ版の必要度はより高いといえよう。最も現在のには、本経のデルゲ版との対校は、東京・東洋文庫や高野山大学などで可能である。

(2) 漢訳、及び口語訳のところでは、漢訳は漢文のままで示すべきであり、さらにもし加えるならば、チベット訳の解説(口語訳)を別途に試みるのが望ましかったのではなからうか。チベット訳と漢訳とが、前後関係や意味内容から一致しても、必ずしも語意の上で充分でない場合が多くあるかと思われる。それは本経のチベット訳が、現存の漢訳からの忠実な直訳態でないことから、充分に予想されることである。その一例(四六〇頁)を示すと、

(250-21) de-nas rgyal-pos kyan dran-sron sprul-pas
smras-pa bshin-du ša dai ŋa sbyar-nas |

(250-22) phyi-de-ñin dran-sron riñ-pa ñon-ba-la phul-lo
とこうチベット訳文に対して、その(訳)として漢訳の直訳文を示している。すなわち、次の如く、

「即ち語の如く弁じ、(鉄)

食し己り還り去る。明日に至り、旧仙飛び来り。(鉄)」
という訳を与えているのである。しかしこの漢訳の直訳文は必

ずしもチベット訳と一致していない。従って、やはり、漢訳は漢文そのまま示しておき、加えてチベット訳の解説文を別に示す必要があるかと思われる。ちなみに、このチベット訳の解説を試みると、

「かくして、王はまた、化仙にいわれた通りに肉と魚とを調合して、

その翌日、老仙が来たので献上した」

というほどの文意となるかと思われる。もとより、著者は、チベット訳の解説を目的としたわけではなく、「蔵漢対照」という整理を研究の目的とされたのであるから、これは全くの筆者の勝手な希望という他はないのかも知れない。

索引(五七四～六三九頁)は、賢愚経本文のチベット訳を中心とした索引(中には還元サンスクリット語も含まれている)である。これによって、本書におけるチベット訳の用例箇所が示されているのみならず、そこには、チャンドラ・ダス蔵英字書をはじめとする諸辞典によつての英訳や、漢訳、及び著者が本書で用いたチベット訳三本の校異までもが記入されている。

三

以上、筆者の勝手な希望も交えて、本書の紹介を行なったのであるが、最後に本書の著者と賢愚経との因縁を鑑みて、著者の長年にわたる御苦労に甚深い敬意を表したい。著者と賢愚経との因縁については、著者自らによって、先に示した「賢愚経探查記」に詳しく述べられている。著者の専門は中国文学

(Chinese Literature) であり、著者は賢愚経を一つの佛典と見る立場に立ったのではなく、むしろよき民話の材料として注意したのである。そしてその注意は、大正九十二年頃からはじまるというのであるから、実に著者と賢愚経との因縁は半世紀にも及ぶのである。しかも単に時間的に長いばかりでなく、著者の本格的な賢愚経研究は、蒙古語訳を読むことからはじまったのであるから、著者は、賢愚経の漢訳はもとより、蒙古語訳とチベット語訳にも通じているという空間的な広さも合わ

せ持っている。このように、著者が賢愚経研究に「病みついて」から半世紀、正しく本書は、著者の one of his chief works として、ここに刊行されたのである。本書が、今後の賢愚経研究者にとつて、それが佛教説話集としてあれ、よき民話の材料としてあれ、不可欠の便利な資料として役立つであろうことは自明である。

(昭和四五年三月、関西大学東西学術研究所、非売品)